

もつともつと自由を…



もつともつと自由を……

昭和五十四年十月十五日 印刷
昭和五十四年十月二十日 発行

定価 二二〇〇円

著者 石川 達三

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京 03 二六六一五一一
編集部 東京 03 二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

もっともっ自由を……

離婚してから八ヶ月になる。愛情がない訳ではなかった。しかし愛情という捕え難きものよりも、彼の妻はより具体的なものを求めた。即ち女性の自主性であり独立であり、解放である。それらはあらゆる文明国の女性のあいだで大流行していたから、ひとりの良人の魅力ぐらいではとても太刀打ちできなかった。彼女は大波にさらわれるようにして、流行にさらわれて行った。

いま、玉村先生の私生活は、何もかも思うようにならない。社会の文明が高度に発達するにしたがつて、男の生活は思うようにならなくなる。いずれの民族においても、彼等が未開野蛮であった時代には、男性たちには自然に備わる威厳があり、妻たちは甘んじて彼の奉仕者になっていた。社会は安定し人々の精神も安定して、庶民の生活に迷いはなかった。恐らくは二度とかえらざる、良き時代であった。一九四〇年から四五五年の頃の世界的大戦争の時期が過ぎると、その次には文化的大変動の時期が来た。古臭い伝統も古臭い習慣も、もろもろの道徳も礼儀も、ことごとく洗い流されて、単純な自由の時代が来た。何もかも自由の時代である。より自由に、更に自由に……一体どこまで自由になろうとするのか。……

校門から内側はるか向うまで銀杏の古木が並木になっていて、その下を歩く時は緑の枝々の

茂みが頭の上に重い。校門の横で女子学生が二人、立ちばなしをしていた。青葉若葉の緑の下で、黄色と赤の衣裳が美しかった。女の衣裳は女の精神を支配する。喪服を着たときは沈んだ黒い心になり、白衣を着たときは誠実なつましい心になる。玉村の姿が近づくのを見ると黄色の学生が微笑を送ってきた。珍しい事であった。昔の学生ならば三尺下って師の影も踏まなかったものであるが、近ごろの学生には、師弟の礼もなければ師への尊敬もない。万民すべて平等であり、礼儀作法などは旧体制であると言うから、それならそれでも宜しい。近頃の学生は道で先生に出会っても、他人のような顔をしている。もともと他人に違いないのだから、それはそれでも宜い。それが学生の自由だと言うのなら、教師には教師の自由がある。こちらも他人のような顔をするまでのことだ。余計な感情の余計な表現は、人生を煩らわしくするばかりだ。ところがその黄色いスカートの学生は二三歩近づいて来て、「玉村先生……」と向うから声をかけて来た。

「先生ネクタイ素敵よ。いまからお帰りですか。先生のお宅は森田町のマンションでしょう。知っていますよ四階でしょう。東南の角の日当りの良い部屋で三DKで、ちよつと広すぎるわ。今はお独りでしょう、誰も居ないんですか……本当に誰も居ないんだったらちよつと十分ぐらい遊びに行っても宜いですか。どうせごみだらけでしょうから掃除ぐらいして上げるわ。却ってお邪魔かしら。……お邪魔だつて構やしない……」

誘いもしないのに二人が歩調をそろえてついて来た。まるで二人が玉村を待ち伏せしていたような具合だった。送り狼という言葉がある。二匹の牝狼だった。まさか取つて喰おうと言うわけでもあるまい。どうするつもりなのか。毎日何百人の女子学生を教えてはいるが、近ごろの女ごころというものは日本の政治よりも不可解だ。別れた妻もその一人だった。つまり支離滅裂である。惻いかな女ほど無茶苦茶である。

「先生いまからお帰りになって、夕御飯はどうなさるの……」と、今度は赤いスカートの丈の高い娘が言った。「先生が御飯をたいたりオムレッツをこしらえたりするところ、見たいわ。きつと

醜態ね。離婚なさって、いまはきつと後悔の最中ね。別れた妻って、憎いですか。そういう体験談って、聞いて見たいわ。男性心理の告白、興味有るわ。本当は何が原因だったの、先生。言ってたって宜いでしょう」

玉村先生は先生だから、この娘たちと教室で何十遍となく顔をあわせている。しかし個人的なつきあひを持ったことは一度もなかった。だから名前は知らない。彼は四十前の男盛りであったから、若い娘たちに興味を持ったのは天の摂理であって、是非善悪を論ずる必要はない。玉村自身はどちらかと言えば事なかれ主義で、性格的には自己防衛型であり、外にむかって強烈な好奇心を持つ方ではなく、むしろ要心ぶかいたちであつた。だから策を弄して自分から娘たちに誘いをかけるような優しい狼ではなかった。しかし今日は相手が二人である。二人であるという事に女ごろの狡猾さが有つた。つまり自分の仲間に罪を着せて自分は悪くなかつたような顔をしようという魂胆であるらしい。ここから先、どうするつもりなのか。とにかくタクシーに乗せて玉村のマンションに着いた。

「先生、私たちが遊びに来たという事は、絶対秘密にしてね」と赤いスカートの細川は言つた。「もしも誰かに知られたら大変なことになるわ。本当は女って不自由ね。お互いに嫉妬するから、結局自分たちで不自由を作っているのよ。女性の解放なんて口先ばかりだわ」

そこまで解っているのなら、自分の愚かしい嫉妬を克服すればよきようなものだが、それは言うべくして実行できない。彼女等の感情は年じゅう矛盾している。自分の言葉に対して無責任だから、自分の言葉の矛盾が一向気にならない。そして他人の不幸を面白がり、自分の不幸を誇張する。「君たち学校は面白いかい。いまの大学に満足しているのかい」

「学校なんて時間つぶしよ。自分の青春を喰いつぶしているのね」と赤いスカートが言つた。

……「高い月謝を払って、毎日おしゃべりをしに行くの。でも結婚するまでは仕方がないわ。本当はわたし、結婚ということには反対なの。結婚したら女性の自由は七十パーセントぐらゐも失

なわれるでしょう。独立独歩もだめになるわ。だけど結婚しなかったら性生活はどうしても不安定になるわね。だからわたし悩んでるの。人生は八十パーセントまでは肉体よ。精神生活なんて本当のところ残りの二十パーセントですからね、だから理論的に言っても精神の自由より先に、肉体の解放を要求するのが当然だと思うわ……大学なんて、要するに待合室よ。自分の乗りたい電車が来るまで、腰をかけて待っているのよ」

この細川すみ子という娘は大変に智的で、聡明なのかも知れない。但し、聡明さをみちびいて行く軌道が無いので、行きたい所へまっ直ぐには行けない。いずれはひと廻りして出発点に戻って来るのだらう。だから彼女の独立独歩は何の役にも立たない。

「結婚というのは、……つまり一夫一婦婚というのは、男性の謀略だと思わう」と黄色いスカートトの山崎八重が言った。「……結婚という罠で女を独占して、女からあらゆる自由を奪い取る為の陰謀よ。そんなものを嬉しがってはいけないのよ。私は結婚絶対反対。女にとって結婚とは犬の首輪よ」

「じゃ、肉体の解放はどうすればいいのさ」

「結婚以外の、自由な関係でいいじゃないの。肉体の關係に精神まで曳きずり込まれる必要、ないわ」

「無責任ね」

「無責任でいいじゃないの。責任なんて、誰の為さ。第一、ひとりの人間がほかの人間に責任を持つって、どんな事？……つまりそれは自由を棄てるって事じゃないの。私はまず何よりも、自由よ。自由万歳だわ」

これもまた大変に聡明な娘だった。但しこの自己肯定型の聡明さは、あまりにも直線的で懷疑を知らない為に、自分に必要な幸福の条件を突き破って、車止めの柵の向うまで突っ走って、脱線転覆する危険がありそうだった。

玉村先生にして見ればこの連中の解放論などは、耳にたこができるほど聞き飽きていた。百人の学生のうちの九十五人までは同じ理窟をしゃべっている。千匹の蚕がみな同じ糸を吐くのと少しも違わない。

「君たちは毎日口をそろえて、雲雀みたいに同じ歌ばかり歌っているが、よく飽きないね。君たちのあこがれている自由というのは、要するに人まねじゃないのかい」

「あの、お話をすみませんが、少しおながが空いたような気がするんです」と山崎八重が言った。「先生は今からどうなさるの？……まさか御自分で葱や牛肉を買って来て御飯を炊くおつもりは無いわね。それではあんまりお気の毒ですからね」

「だからどうすればいいんだね」

「簡単にしましょうよ簡単に……。電話をかけたら喜んで持ってくるお店があるはずよ。商人を喜ばせてやりましょうよ。鮎屋とか鰻屋とか……。鰻は高いわね、私たち先生に御馳走になるつもりではないんです。自分の肉体は自分で養うわ。当り前だと思うの。親子どんぶりにしましょうか。その方が安いわ。安いって大事なことよ。今の鶏はみんなブロイラーだから、生前は運動不足で、自由を束縛されていて、不幸な雞だったろうと思うわ。だからみんなまずいのよ。でも今日は我慢しましょう」

近頃の女子学生もブロイラーと同じことで、ブロック塀で囲まれた大学で、哲学論理学仏文学などという輸入品の混合飼料ばかり詰め込まれて、頭はすっかり運動不足になり、どの牝雞もみな自由自由と同じ啼き声で啼いているが、その啼き声が玉村は耳について、うるさくてならないのだった。自己肯定型の山崎八重は、自分の善意を信じているから、自分の言うことは他人も賛成してくれるものと思っていた。だから彼女は勝手に電話をかけて、先生の分まで親子どんぶりにしてしまった。それから向き直って煙草をくわえた。

「ねえ先生、ちょっと内密に伺いたい事があるんです。先生は離婚の直前、わかればなしの最中

によ……（内密のはなしにしては声が大きいな）御免なさい、私って、はしたないわね……ねえ、一週間も十日もぶっ続けに夫婦喧嘩をしている時よ、そういう時には二人の性関係はどうなっていたんですか、それが知りたいの。だって離婚というのは愛情が無くなったからでしょう。愛情がなくなっても男性はまだ性関係を要求するんですか、奥さんは勿論拒否するでしょう。（あら拒否しないかも知れないわよ）拒否するにきまっているじゃないの。拒否しなかったら不純だわ。（不純って何よ）不純って、不純なことよ、つまり売春みたいな事よ。（売春が何が悪いのさ）あら、売春が悪くないって言うの？」

「あんた古いわね、ずいぶん古いわ、だって考えてごらんよ、愛していなくても慾望は起るかも知れないわ。精神と肉体は別々よ、いつだってその二つが一致するとは限らないわ」

「あんた不潔……おお不潔、おどろいたわ……」

女は三人寄れば、先ず性について論ずる。或いは内証はなしに耽る。殊に新時代の理想に燃える若き女性たちはあけすけに性を論じ、具体的且つ詳細に体験を語る。言葉に多少の誇張はあるが、表現が誇張されているのは心が波立っていることの証拠だ。

「もう少し洒落た話をしようじゃないか」と玉村先生は言った。「君たち女だろう。女というものは性について語る時には、もうすこし恥かしがるもんだ。そういう女の方が何となく可愛く見えるんだよ」

「あら、どうして性が恥かしいんですか」と、直線的な山崎八重が直線的に反撥して来た。性はすべての人間が持っている先天的な生理であり先天的な慾望です、それがどうして恥かしいんですかと言う。……幼稚な理窟だ。彼女は聡明ではあるけれども、彼女にはそれだけの理論しか無い。第一、彼女には自分の理論を裏付けるだけの性的体験の深さがない。

「君たちの話を聞いていると、君たちの自由解放なんて、大した事はないようだね。直接の体験が足りないのかな」

「直接体験による性的な成長というのは、大事なことだと思わね」と細川すみ子が真剣な言い方をした。「でも、それだけでは何か足りないような気がするわ。つまり解放かしら。解放って具体的にはどういう事かしら」

「自分の直接的な性体験というのは、それ自身が解放じゃないの」

「そうね、でも何からの解放なの」

「自己からの解放よ」

「まるでソクラテスみたいね」

「そうよ、自己を自己から解放することよ。自己拡大よね」

「だけどわたし、性というものにはもつと何か変なものが有ると思うの、それがまだ解っていない気がするわ」

「体験が足りないのね。段々と解って来るわ。あなたの体験は友達のお兄さんでしょう。でもあれはもうやめたんでしょう。なぜ永続しなかったか。そこに何か問題があるわね」

「わたし正直言って失望したの。なあんだ、こんなものかと思ったの」

「わたしもよ。ねえ先生、本当はどうなの。性というものは小説に書いてあるような、あれほど素晴らしいものじゃないのかしら」

この娘たちは迷っている、と玉村教授は思った。その迷い方は幼稚で、新鮮な女の匂いがしていて、可愛かった。彼女等は何程かの体験をもっている。しかしその体験を信じていない。細川すみ子は（友達のお兄さん）との関係をやめてしまった。（わたし、正直言って失望したの、なあんだ、こんなものかと思ったの）それに対して山崎八重も、（わたしもよ、ねえ、本当はどうなの）と語っている。そして二人とも、自分にはまだ本当の性が解っていないと考えている。もつと素晴らしい、輝くばかりの性にいつかはめぐり会えるものと期待している。そこにこそ、女の人生の理想があると思ひ描いている。

しかし彼女等が理想の性を体験する日が、果して有るかどうか。また幸にしてそのような機会があったにしても、性の歓喜は所詮は感覚にすぎない。感覚に於ける百パーセントの満足が、永続したためしは無い。

明治時代、あるいはそれ以前の女たちは、自分のために選び与えられた配偶者を、自分に許された唯一の性の対象と観念し、思いあきらめ、その運命に満足していた。従って多くは性の不満もなく、理想の性を幻想することもなく、つましく平和で安定した性生活を持っていた。たとい性の不幸があっても、それを不幸とも知らずに、不幸の中に安住していた。

しかし性文明の進んだ現代の女たちは、自分の性について懐疑的であり、批判的である。テレビや演劇や小説が彼女等の懷疑を日ごと夜ごと刺戟しつづける。聡明な彼女等はドラマや映画や文書の内容と自分の体験とを比較検討する。そして自分の体験に不満を感じる。(わたし正直言つて、失望したの、なあんだ、こんなものかと思つたの……)そこで彼女等はあせりを感じ、自分の不幸を感じ、何とかして最高の性を体験したいと念願する。幸いな事にいま世界中の文明国では、女性の自由解放が大流行である。倫理道德という思想はすたれ、女の貞操という言葉は忘れられてしまった。しかし理想の性は容易に体験されるとは思われない。それまでは体験を重ねて見るより仕方はないだろう。(友達のお兄さん)に失望した時には、また別の友達の、別のお兄さんに望みを托するばかりだ。

……かくて若い進歩的な娘たちは、何年も何年も性の放浪を続けるだろう。そして自分の不幸を積み重ねながら、自分の不幸を確認して行くことになるだろう。聡明な細川すみ子もその聡明さの軌道が不安定だから、いずれはひと廻りして出発点に戻って行くだろう。彼女等の欲望は自己中心的で、いら立たしく、自分の事しか考えていないようだった。

山崎八重が啞えていた煙草を揉み消して、齒切れの良い口調で言った。「先生愛つて何ですか。わたしどうしてもよく解らないの。要するに愛つて、本当はエゴイズムだわね。そうでしょう。」

恋愛だって親子の愛だって、結局はエゴイズムだわね」

そうだそうだ、直線的な性格の山崎の言いそうな事だ。相手の事を一切考えない人間にとつては、愛だろうと恋だろうと、みんなエゴイズムであるに違いない。そしてみんな孤独だ、と玉村先生は思った。この娘たちは愛を理解することができないように、自分の孤独を感じる能力も持たないのではないだろうか。その分だけ、却って仕合せなのかも知れない。……

学生たちが帰ったあと、バジャマに着がえ、湯槽に湯がたまるまでのあいだと思つてベッドに横になると、玉村はそのまま仮睡をしてしまった。若い娘たちの話は退屈でも、同室しているだけで楽しい刺戟にはなる。殊に話題が性に関係したことになって来ると彼女等は興奮し、思わず正態を晒す。心がみだれ表情が崩れる。その分だけ肉体も内部から崩れていたかも知れない。若い女が男と同席して性を語るといふことは、なかばまで自分をさらけ出した事であり、自分の垣根を開いた事でもある。……電話のベルが鳴つて眼がさめた。湯槽に湯があふれていた。

「先生？……わたし細川です。いま独りなの。やっとこさ山崎さんと別れて公衆電話にはいったという訳。あのひとしつこいのよ。でも今晩は楽しかったわ。本当はわたし、一人で行きたかったの、先生と二人きりになって見たかったの。今度はきつと一人で行きます、三四日うちにね。先生山崎さんを、好きになつたら嫌よ。心配だわ。でも仕方がないわね、あの人だって先生を好きになる自由は、あるんですものね。権利は平等ですからね、辛いけど我慢します。でもわたし嫉妬ぶかいのよ。嫉妬つて、何だか良い気持よ。嫉妬つて闘いでしよう。つまり愛している事の証拠でしよう。先生……わたし先生を、愛しているわ。ほんとよ。おやすみなさい」

嫉妬は闘いで、権利は平等で、愛情はエゴイズムだと彼女は言う。理窟の多い女だ。勝手に何でも言うが宜い。服装に流行があるように、思想にも流行がある。現代の愛情はエゴイズムで、現代の嫉妬もまた平等の権利である。流行にさからつてみても始まらない。時代遅れと言われる

だけのことだ。細川すみ子にソクラテス的な自由や解放があるのだろうか。むしろギリシャ神話的なナルシズム、自己陶醉の方が多分に有るのではないだろうか。……

入口の呼鈴が短くちんと鳴った。客が来るような時間ではない。玉村は迷った。別れた妻が何か話があつて、押しかけて来たのではないだろうか。しかし別れた妻なら何も怪しい者ではない。そして（女）であることも確実だ。（先生、離婚の直前、何日もぶっ続けに夫婦喧嘩をしていたとき、二人の性関係はどうなっていたんですか？……）そんな話は公表する必要はない。ともかくも彼は入口の鍵をはずした。相手は何者か。……いきなり外からの力で扉は押し開けられ、さつき出て行ったばかりの山崎八重が、黄色いスカートを翻して彼の肩に飛びついて来た。

「先生、うれしい、やっと二人きりになったわ。細川さんが私を放してくれなかったの。ああ苦しい。あの人しつこいのよ。わたし走って来たの。エレベーターが降りて来ないもんだから、階段を走って上ったの。ああ苦しい、わたし心臓が悪いのよ。ちよつと横にならせてね。あらこのベッド温いわ。先生寝ていたのね。始めからあの人を誘わないで、私ひとりで来ればよかったわ」

先生は壁にもたれて黙って見ていた。夕方には校門の前で、山崎と細川と二人で示し合わせて、仲良く誘いあつて先生を訪ねて来た。その時までには二人は確かに仲間だったはずだ。どこから彼女等の裏切りが始まったのか。二人が二人とも、一言のことわりもなしに相手を裏切っている。細川は電話をかけて来た。女性的な無責任体質の現れであるかも知れない。そして山崎八重は直線的だから、真つすぐに駈け戻つて来た。カルメンのように、女性とは相手を裏切るものなのか。友人を裏切ったあとでは、親をも兄弟をも裏切るだろう。愛人をも良人をも裏切るだろう。その裏切りを、自分では裏切りと感じていない。私の自由よ、と彼女等は言うだろう。カメレオンは体色を変えた時にも、自分の変色に気がついてはいないのだ。他人にはそれを、咎める権利はない。カメレオンの自由だ。

「水をやろうか」

「ええ、水ください……有難う、おいしいわ。ああ苦しかった。さわって見て。ときどきよ、ね、ひどいでしょう。すぐこんなになるの」

胸の脈に男の手を触れさせれば、その手が乳房に触れるのは当たり前だ。女に、そのくらいの計算がないはずは無い。それは誘いだった。あるいは女の畏だった。畏を仕掛けて置いて、あとから問題が起ったとき、女はあの男が狼であった、と言い募る。そして自分は小鳩のように優しく無力であったと言うのだ。だから女の乳房までは近づいても、そこから先は上手に畏を避けて、そっと身を引いて置く方がいい。玉村先生は事なかれ主義で、自己防衛型であったから、事件は起したくなかった。しかしそれでは女の気持は治まらない。だから彼女はやがて蔭口を利く。(あのひと?……ふん、卑怯ものよ)

卑怯と言われては男の面目はまる潰れだ。しかし畏と解っている畏に、見す見す引かかるのは賢明でない。だから男は逡巡する。女はその逡巡をもどかしがる。だから彼女は先生の耳に口を近づけて、優しくささやいた。

「大丈夫よ先生、心配ないわ。わたしピル、飲んでるの」

そうかそうか。それならば安心だ。医学も薬学も進歩したものだ。封建時代の女たちや、明治大正の女たちは、一時の情熱の赴くまま、一時の本能に駆り立てられて、危険と知りつつ危険に近づき、産みたくもない子を産んでしまい、一生を台無しにしてしまった。神が与えた刑罰であったかも知れない。しかし人間も惻口になると、神の処罰なんかとうまうまとはまり込むような愚かな事はしない。自由万歳。神の摂理はもはや何の権威も持たない。女は彼女の生理から解放されたのだ。その解放はひとりきりでは実感が無い。男が手伝ってやることだ。あとに責任が残らないと解れば、自己防衛型の玉村先生も気が楽だった。気は楽であつたけれども、彼は何かしら味気ない気がした。ピルとは何か。人類何十年の歴史を通じて今日まで続いて来た神聖なる行為、種族保存のための厳粛なる行為を、その精髓だけを抜きにして、軽薄にして無意味な享樂

行為に拘り替えてしまった。その驚くべき詐欺行為を可能ならしめたものが、即ちビルだ。永遠に解放されるはずのない女性が、苦痛もなく、何の犠牲をも払うことなしに、楽々と自分の宿舎から解放されたのだ。解放万歳。この時を境にして本当の女性解放ははじまった。女性は急速に進歩するに違いない。赤いスカートの細川も黄色いスカートの山崎も、みんな解放だ。彼女等は新しい時代の太陽となるであろう。

「ビルは薬だけど、薬以上のものなのよ」と山崎八重は強い口調で言った。「つまりビルは、肉体の解放だけではなくて、精神までも解放してくれるのよ。そうでしょう、先生……」

ビルは女の肉体から女の精神を解放してくれたのだ。それが本当の、精神の独立というものであろう。人間が開発したあらゆる物質のうちで、ビルは最高の発明であるかも知れない。女を女から解放したばかりではなく、女に対する責任から男をも解放しているのだ。……「ビルを開発してくれた人に、ノーベル賞を贈るべきだと思わね、わたし……」

山崎八重の意見は直線的で、強烈だが、主旨はまことにその通りだ。世界は生れ変わるだろう。巷間の情痴事件は少くなり、家庭裁判所はひまになるだろう。世の中はおだやかになり、人間の表情は明るくなるだろう。山崎は心に何の憂いもなく、ただ喜びに満ちて単純に、その夜の情感を愉しんで居たようであつたが、性の理想についての彼女の疑問が、いくらかでも解決したかどうか……しかし玉村教授はどういう訳か、少し心の歩調が合わない気がした。この、自分の抱擁にまかせられているものは、それは美しく若い人間の女ではなくて、女のかたちをしたもので、しかも女の魂をもたないもの、女の（縫いぐるみ）を愛撫しているような、何となく嘘をつかれているような、そういう変な味覚を感じていた。何の危険もない、無害で、そして無益な女というものは、たとえばカロリーの少いコンニャクのような食べもの……を食べているような味気ない気がした。

二日過ぎて三日目の晩、こんどは細川すみ子がやって来た。綺麗に化粧をして、イヤリングを